

黙示録9章「地獄からの軍隊」

1A 底知れぬ所からのいなご 1-11

1B 天から墮ちた星 1-2

2B サソリのような力 3-6

3B いなごたちの姿 7-11

2A ユーフラテス川からの騎兵 12-21

1B つながれていた四人の使い 12-15

2B 火と煙と硫黄の出る馬 16-19

3B 悔い改めない生き残りたち 20-21

本文

黙示録 9 章です。私たちは今、第七の封印を子羊が解かれて、その後で七人の御使いがラッパを鳴らしているところを見えています。第一から第四の災いは、火による天災でした。天からの火によって、海、陸、川のそれぞれ、三分の一が滅びました。そして月と星、太陽の三分の一も暗くなりました。そして残りの三つのラッパであります、それらを、中天を飛ぶ鷲が、「わざわざだ、わざわざだ、わざわざ来る」と叫んで、これまでの災いの度合いを超えた、恐ろしいものになることを予告したのです。そしてそれが、「地獄が解き放たれた」と言ってよいでしょう。

私たちは、神によって保たれている世界に生きています。神が保っておられるので、天も地も、その中にあるものに秩序と平和があります。けれども、人はそのことを認めないで、神に反抗し、無視し、自分勝手なことをしています。主はキリストを遣わされ、その罪の贖いを成し遂げられましたが、それでもこの恵みを拒む者たちがいます。そこに残されているのは神の御怒りです。それで、主は、ラッパの災いにおいて、被造物を保っておられる部分を一部、やめられるのです。それで、天から火による裁きが下りました。

そして私たちがあまり気にしていないのが、目に見える被造物の世界だけでなく、目に見えない被造物の世界があるということです。主が、御使いなども支配されて、その秩序を保っておられます。主がすべてを支配されている時に、それら目に見えない存在も支配されていることを、聖書は何度となく教えています。パウロがロマ 8 章でこう言いました。「8:38-39 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いたちも、支配者たちも、今あるものも、後に来るものも、力あるものも、39 高いところにあるものも、深いところにあるものも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」

そこで主は、ご自身の支配において、目に見えない世界における秩序の一部をやめていかれま

す。それは、ご自身に従わず、墮落した天使であります。おそらく、悪霊と呼ばれる者たちは、これら墮落した天使であろうと思われます。アダムが罪を犯す話は、そこからが神への反逆の始まりではなく、そこにすでに蛇がいました。天において天使長の一人が神に反抗し、それで手下どもも含めて、おるべき領域から追い出されたところから始まります。そしてある者たちは、地獄に縛られています。またある者たちは、空中にいます。ある者たちは地上に徘徊しています。最後には、悪魔そして悪霊どもは、すべて、火と硫黄の池、ゲヘナに投げ込まれます。

しかし、そうした墮落した天使どもは、主ご自身の許しなしには、何も活動ができません。それで、そうした悪霊どもの動きは、かなり制限されています。もちろん、罪の中にいる者たちはみな、サタンの支配にあって、キリストにある栄光を見えないようにされています。意図的に、偶像礼拝の深み、悪霊の働きに心を開かないかぎり、そうした世界は経験することは少ないでしょう。しかし、恐ろしい世界があるのです。私もかつて、サタンの攻撃を強く受けた時に、「死ぬことよりも、もっと恐ろしいと」思いました。しかし、今は抑えられているこれら悪霊どもの働きを、主は裁きとして許可を与えるのです。

1A 底知れぬ所からのいなご 1-11

1B 天から墮ちた星 1-2

¹ 第五の御使いがラツパを吹いた。すると私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。その星には、底知れぬ所に通じる穴の鍵が与えられた。

この星は、8章に出てくる、物理的な星とは違います。聖書では、星というものが、神の栄光を現す存在として出て来てきます。黙示録ですでに、イエスが右手に握っておられた七つの星は、七つの教会に対する御使いであると書かれていました。世の終わりに義人たちが星のように輝くことを、ダニエル書 12章でも書かれています(12:3)。ヨブ記には、主の天地創造の時、「38:7 明けの星々がともに喜び歌い、神の子たちがみな喜び叫んだときに。」とあります。

その「一つの星が天から地に落ちる」のを見たのです。御使いたちの中で、神に仕える使いもいれば、神に反抗して、領域を失って落とされた使いもいます。この後者の方であることが分かります。イエス様が、弟子たちが御名によって悪霊どもを追い出して戻ってきた時に、こう言われました。「ルカ 10:18-19 サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました。19 確かにわたしはあなたがたに、蛇やサソリを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を受けました。ですから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」イザヤの預言に、「明けの明星」と呼ばれて、サタンが高見に行こうとしたら、よみに落とされたと書かれている預言がありますね(14:12-15)。1節にある星は、サタン本人かもしれないし、他の墮落した天使かもしれません。

それが、「底知れぬ所に通じる穴」の鍵が与えられたとあります。聖書には、地の下にあるものと

して、つまり地獄として、主に三つの獄屋を教えています。

一つは、「陰府(よみ)」です。これは旧約聖書では特に、死者に行くところとして描かれています。コラがアロンとモーセに逆らったときに、地が割れて、地の口がコラを呑み込んだとありますが、モーセはそのことを、「生きたままよみに下る(民数記 16:30)」と言いました。そして預言者ヨナは、大きな魚に呑み込まれて、海底の底に行き、そこに滅びの穴があることを言及しましたが、それを「よみ」と呼んでいます(2:2)。そして、新約聖書ではギリシア語が「ハデス」であり、新改訳の第三番まではそのままハデスと訳されていました。

もう一つは、ゲヘナがあります。ゲヘナは、エルサレムの町の南にある「ヒノムの谷」から来ている言葉です。そこでは絶えず、神殿における、動物のいけにえの老廃物などが焼却されていました。そのため、イエスは「消えない火(マルコ 9:43)」と言い表しておられます。火と硫黄の池というもの、それです。ゲヘナは、元々、悪魔と悪霊どもが投げ込まれる場として作られました。イエスは、御国に入らない、左の山羊に選り分けられた者たちに、「悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。(マタイ 25:41)」と言われます。けれども、悪魔とその使いに追従する者たちは、彼らの行くところに自分たちも行くのです。

黙示録の学び 20 章の最後のところで、詳しく学びますが、キリストを信じない者たちは、死後に、ハデスに下ります。そして最後の審判の時に、よみがえり、そこで裁かれて、ゲヘナに投げ込まれることが書かれています。ハデスは、云わば刑が決まるまでの拘置所であり、ゲヘナが、刑が宣告された後の刑務所のようなところです。

そして、三つ目は、ここにある「底知れぬ所」です。「底がない縦穴」という意味です。ここは、墮落した天使どもを閉じ込めておく獄屋であると考えられます。ペテロとユダがそれぞれ手紙で、墮落した天使が閉じ込められていることを書いています。「Ⅱペテ 2 章 2:4 神は、罪を犯した御使いたちを放置せず、地獄に投げ入れ、暗闇の縄目につないで、さばきの日まで閉じ込められました。」そして、「1:6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。」とあります。

ゲラサ人地方で、イエスさまがレギオンという悪霊どもに対峙されたとき、「ルカ 8:31 悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行けと自分たちにお命じにならないようにと懇願した。」とあります。それで、豚の中にはいれ、とイエスは命じられました。ですから、天から落とされて、地上に徘徊している悪霊どもがいるし、底知れぬ所に閉じ込められている悪霊どももいます。この、底知れぬところに閉じ込められていた悪霊どもが、今、鍵によって戸が開かれて、地上に解き放たれるのです。

² それが底知れぬ所に通じる穴を開くと、穴から大きなかまどの煙のような煙が立ち上り、太陽と

空はこの穴の煙のために暗くなった。

ちょうど、地の下のマグマから煙が上がって来るかのように、煙が立ち上りました。それによって、すでに三分の一、光がなくなってしまった太陽の光もさらに遮られて、暗くなっています。これは、終わりの日のしるしとして、ヨエルが預言したことです。「2:30-31 わたしは天と地に、しるしを現れさせる。それは血と火と煙の柱。【主】の大なる恐るべき日が来る前に、太陽は闇に、月は血に変わる。」ここの「煙の柱」というところです。

当時、アジアの七つの教会の人たちも、ユダヤ人でなくとも身近な存在がありました。地下から来る硫黄の煙について、です。ラオディキアのそばにはヒエラポリスという町があります。コロサイ書に、ラオディキアと共に出てくる町です。そこは温泉が出ます。そして、二酸化硫黄が出てくる場所があります。それを吸引すると、脳を破壊し、死ぬかもしれません。けれども、アポロン神殿の祭司がそこに入り、出て来て、幻覚を見てお告げを語るのです。なぜなら、ギリシア神話では、ハデスという神が地下の世界にいると信じられていました。今もそこに遺跡があります。ですから、ヨハネの見たこの幻を聞いた時には、彼らには身近な光景だったのです。

2B サソリのような力 3-6

³ その煙の中からいなごが地上に出て来た。それらには、地のサソリが持っているような力が与えられた。

文字通りの、いなごではありません。いなごのような攻撃をして、災いをもたらすということです。出エジプト記の十の災いの一つに、いなごの大群が押し寄せました。芽もすべて、文字通り根こそぎ作物という作物を食べ荒らして、通り過ぎたのです。そして、今、言及したヨエルの預言が、ここ黙示録 9 章の背景となっています。そこに、ヨエルは、度々訪れるいなごの大群による被害をとおして、イスラエルに敵が大軍をなして攻めてくることを預言しました。1 章 2-6 節まで読みます。

2 「長老たちよ、これを聞け。この地に住む者もみな、耳を傾けよ。このようなことが、あなたがたの時代に、また先祖の時代にあっただろうか。3 これをあなたがたの子どもたちに伝え、子どもたちはその子どもたちに、その子どもたちは後の世代に伝えよ。4 噛みいなごが残した物は、いなごが食い、いなごが残した物は、バツタが食い、バツタが残した物は、その若虫が食った。5 目を覚ませ、酔いどれよ。泣け。泣き叫べ、すべてぶどう酒を飲む者よ。甘いぶどう酒があなたがたの口から断たれたからだ。6 ある国民がわたしの国に攻め上って来た。それは力強く、数えきれない。その歯は雄獅子の歯、それには雌獅子の牙がある。7 それはわたしのぶどうの木を荒れすたらせ、わたしのいちじくの木を木っ端にした。これを丸裸に引きむき、投げ倒し、その枝々を真っ白にした。

ここの 6 節の「ある国民がわたしの国に攻め上って来た」とあります。いなごのようにして、攻めてくる者たちがあるということです。ここ黙示録では、それが底知れぬところからの悪霊どもの群れであります。

⁴ そして彼らは、地の草やどんな青草、どんな木にも害を加えてはならないが、額に神の印を持たない人たちには加えてよい、と言い渡された。

悪霊どもによる災いは、いなごとは大きく異なります。いなごは、草木を食べますが、人間はもちろん痛めつけません。しかしここでは逆です。草木には害を与えず、人間にだけ害を与えます。

しかし、「額に神の印を持たない人たち」とあります。7 章で、十四万四千人のイスラエル人が額に神のしるしを押されたところを読みました。神は、彼らをこの災いから守ってくださいます。次に出てくるのは、14 章、シオン山におられる子羊と共にいます。つまりイエスが再臨されるまで、彼らは災いから害を受けず、守られるということです。

⁵ その人たちを殺すことは許されなかったが、五か月間苦しめることは許された。彼らの苦痛は、サソリが人を刺したときの苦痛のようだった。⁶ その期間、人々は死を探し求めるが、決して見出すことはない。死ぬことを切に願うが、死は彼らから逃げて行く。

この災いの目的は、「死なないで苦しめる」ことであります。「五か月間」とありますが、いなごの生きているのは、5 月から 9 月という五か月間と言われています。その間のみ、彼らを苦しめます。

死にたいほど苦痛なのに死ねないというのは、恐ろしいことです。例えば、拳銃自殺をしたところで、自分の頭が半分なくなったとしても、それでもその痛みを伴いながら生き延びてしまいます。ここでは神は、不信者らに、「死んだということは、意識がなくなるということではないのだ」と、死後の苦しみについて教えられたのだと思います。金持ちとラザロの話思い出していただくと、金持ちは、よみの中で苦しみ悶えています(ルカ 16:25)。地獄における苦しみを、今、この地上において苦しまなければいけない、ということです。生き地獄が比喩ではなく、文字通り起こるのです。

3B いなごたちの姿 7-11

⁷ いなごたちの姿は、出陣の用意が整った馬に似ていた。頭には金の冠のようなものをかぶり、顔は人間の顔のようであった。⁸ また、女の髪のような毛があり、歯は獅子の歯のようであった。⁹ また、鉄の胸当てのような胸当てを着け、その羽の音は、馬に引かれた多くの戦車が戦いに急ぐときの音のようであった。¹⁰ 彼らはサソリのような尾と針を持っていて、その尾には、五か月間、人々に害を加える力があつた。

おぞましい姿です。いなごとと言っても、その姿はむしろ、馬のようなものでした。しかも戦う馬です。その姿はこの世のものではありません。悪霊の世界というのは普段、見聞きしません。しかし、オカルトに携わって悪霊に遭遇した人々は、おぞましい姿を生で目撃しています。麻薬をやりながら、そのようなオカルトにはまっている人もいますし、また淫行を伴っている場合もあります。すでに、ティアティラの教会に対するイエスのことばに、「サタンの深み」という言葉がありました(2:24)。オカルト、偶像に献げる儀式、薬物、淫行が、混じり合っていたのです。

また、この容姿は、他の聖書の箇所に出て来る、いろいろな存在とも相重なっています。金の冠について、24 人の長老たちも金の冠をかむっていました。顔が人間の顔であります。四つの生き物、またケルビムも人間の顔を持っていました。そして長い毛があり、それから歯が獅子の歯のようだとありますが、ダニエルの見た第一の獣は獅子であり、第四の獣は、鉄の牙を持っていましたね。そして鉄の胸当てですが、鉄はローマの粉々に打ち砕く力を示していました。そして、翼は、御使いたちの多くが持っているものです。エゼキエルの見たケルビムの幻には、彼らが翼を動かすと、大水の轟のようであり、陣営の騒音のような大きな音だとあります(エゼキエル 1:24)。いろいろな意味で、墮落した天使の姿をしております。御使いのようであって、ダニエルの幻に出てくる獣のような獐猛さがあります。

そして最後に、尾を持っていて、それがサソリのような尾と針を持っています。イエス様は、蛇やさそりを私たちが踏みつけると約束してくださいました(ルカ 10:19)。ですから、これは悪魔がもたらす痛みと苦しみであります。

¹¹ いなごたちは、底知れぬ所の使いを王としている。その名はヘブル語でアバドン、ギリシア語でアポリュオンという。

実際のいなごは、箴言 30 章 27 節に書かれていますが、王はなく、隊を組んで出て行きます。けれども、ここでは王がいます。彼らは、底知れぬ所の王として、サタンを抱えています。彼の名は、「アバドン、アポリュオン」とありますが、どちらも「破壊」という意味です。破壊者です。これが悪魔の名前です。私たちを破壊します。「ヨハネ 10:10 盗人が来るのは、盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするためにほかなりません。わたしが来たのは、羊たちがいのちを得るため、それも豊かに得るためです。」

2A ユーフラテス川からの騎兵 12-21

1B つながれていた四人の使い 12-15

¹² 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。

中天を飛ぶ鷲が、「わざわいだ、わざわいだ、わざわいが来る」と叫んでいましたが、その最初

の災いが過ぎ去りました。なお二つの災いが来るのです。いなごの災いだけでも、もう終わりにしてくれ、十分だと思ってしまうものです。しかし、これでもか！というばかりに、なお災いが下ります。¹³ 第六の御使いがラツパを吹いた。すると、神の御前にある金の祭壇の四本の角から、一つの声が聞こえた。

第六のラツパです。ここでは、金の香壇から声がしています。ラツパが吹き鳴らされる前に、御使いが、香壇の火を地に投げつけたことを思い出してください。その同じ香壇の、四隅の角から声が聞こえました。祭壇の四隅は、角の形をしています。雄羊や雄牛の角を指していて、力や救いを表しています。8章では、香壇からの煙は、聖徒たちの祈りに神が答えられる災いと言えます。殉教した聖徒たちが、神が不正や悪に対して、正しい裁きを行われないのですか？という祈りと願いに、主が答えられているのです。

¹⁴ その声は、ラツパを持っている第六の御使いに言った。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている、四人の御使いを解き放て。」

第六は、大河ユーフラテスにいる、墮落した御使いからのものです。「大河ユーフラテス」は、聖書の中でとても大事な霊的意味を持っています。創世記の天地創造の話を出せませんか、エデンの園には四つの川が流れていて、その一つがユーフラテス川でした。けれども、すでにそこに悪魔がいて、蛇が女を惑わし、禁じられた実を食べさせました。そして、ユーラテス川河畔地域、シナルの地で、ノアの子孫が一つに集まり、そこに天に届く、自分たちの名のための塔を建てようしました。バベルの塔です。それからというもの、その地域バビロンは、偽りの宗教の発祥地となりました。そして、黙示録、主の再臨の前にバビロンが倒れる幻があります。そこで御使いが叫んでいます。「18:2 倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟となっているのです。

ですから、ここでは「四人の御使い」は墮天使です。7章では、地に海に、木に害を加えないように地の四方の風を押さえていた四人の御使いが出ていますが、彼らは神に仕える天使でしょう。こちらは、墮落した四人の使いが、底知れぬ所ではなく、ユーフラテス川の付近に閉じ込められていたということになります。

そして、大事な点を取り上げないといけません。底知れぬ所の鍵を開けた星であっても、ここで四人の御使いを解き放つにしても、神ご自身が支配していることが見えてきます。サタンや悪霊どもの動きは、あくまでも神の主権の中で、神の許しがなければそうならないのです。主が、サタンとその手下どもの動きを、それがご自身に反抗するためであっても、ご自分の栄光のためにお用いになっているということを知ることとはとても大切です。これが、私たちが悪に対する見方であるべき

で、すべては主の御手の中にあり、そこに私たちは安息を得るのです。

そして主は、こうした悪の勢力を、ご自身の正しい裁きのために用いられるということを知るのも大事です。主は、福音を拒んだ者たちに、こうした惑わしに惑わされるままにされるのです。

¹⁵ すると、その時、その日、その月、その年のために用意されていた、四人の御使いが解き放たれた。人間の三分の一を殺すためであった。

驚くことに、この時のために、その定められた年月に、これらの御使いは長いことつながれていました。神の永遠のご計画の中で、定められていたのです。

そして、人を殺しますが、なんと「三分の一」です。ラツパの災いは、三分の一が続いています。地の三分の一が焼かれました。海の三分の一が血になりました。川の三分の一とその源の水が苦くなりました。そして、太陽、月、星の三分の一が暗くなりました。そして、人のいのちも、三分の一が損なわれます。世界の総人口は今、約 80 億人ですから、今、この災いが起こったら、約 27 億人が殺されることとなります。

3B 火と煙と硫黄の出る馬 16-19

¹⁶ 騎兵の数は二億で、私はその数を耳にした。

ヨハネは数を聞きました。驚くべき人数です。「二億」とあります。ギリシア語では、もっと強調されていて、「一万かける一万かける2」というように書かれています。それで二億です。そして、「私はその数を耳にした。」とヨハネは、聞いたとおりをそのまま証言していますから、実際にそれだけの人数がやってきます。

ローマを何世紀にも渡って東方から脅かしていたパルティア人がいました。イラン発祥の国です。彼らは騎兵による戦いで有名です。東方大河ユーフラテスから騎兵としたら、当時、この啓示の朗読を聞いていた人々は、パルティア人と重ねて聞いていたかもしれません。けれども、それでも、2億という騎兵には到底及びません。当時の世界総人口よりも多い人数なのですから！

¹⁷ 私が幻の中で見た馬と、それに乗っている者たちの様子はこうであった。彼らは、燃えるような赤と紫と硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄が出ていた。¹⁸ これら三つの災害、すなわち、彼らの口から出る火と煙と硫黄によって、人間の三分の一が殺された。¹⁹ 馬の力は口と尾にあって、その尾は蛇に似て頭を持ち、その頭で害を加えるのである。

この騎兵が、悪霊どもの現れであることは明白です。胸当てをつけていますが、燃えるような赤、紫、硫黄の色であり、まさに火と硫黄の池と同じ、地獄の色であります。馬の頭が獅子の頭のようになっていますが、獅子は動物界の王者と呼べる存在です。そして特徴的なのは、火と煙と硫黄が口から出てきていることです。これもまた、地獄の火が口から出てきていると言えるでしょう。ですから、地獄の火で殺されていると言ってよいでしょう。さらに、口からだけでなく尾が蛇の頭になっていて、それで危害を加えます。蛇と言えば、エバを惑わしたあの蛇を思い出します。サタンのもたらす苦しみです。

そして、この啓示は、ヨハネが新たに受けたものではありませんでした。ヨエルが主の日は、こうなるのだと神に言われたことであります。2章 1-8節を読んでみましょう。

1 「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときをあげよ。」地に住むすべての者は、恐れおののけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が、暁とともに山々の上に進んで来る。このようなことは、昔から起こったことがなく、これから後、代々の時代までも再び起こることはない。

3 彼らの前は火が焼き尽くし、うしろは炎がなめ尽くす。彼らが来る前は、この地はエデンの園のよう。しかし、去った後は、荒れ果てた荒野となる。これから逃れるものは何もない。4 その姿は馬さながら、軍馬のように駆け巡る。5 その音は戦車のきしり、山々の頂を飛び跳ねる。その音は刈り株を焼き尽くす火の炎、戦いの備えをした強い民のよう。6 諸国の民はその前でもたえ苦しみ、顔はみな青ざめる。

7 それは勇士のように走り、戦士のように城壁をよじ登る。それぞれ自分の道を進み、進路を乱さない。8 互いに押し合わず、それぞれ自分の大路を進む。投げ槍が降りかかっても、止まらない。9 町に襲いかかり、城壁の上を走り、家々によじ登り、盗人のように窓から入り込む。

このように、ヨエルの預言が終わりの日に起こる、9章の二つの災いも見て、語っていたことが分かります。主の日の災いです。

4B 悔い改めない生き残りたち 20-21

そこで、最も恐ろしいことが起こります。災い以上に恐ろしいこと、それは頑なな心です。この二つの災いをもってしても、生き残った人々が悔い改めませんでした。

²⁰ これらの災害によって殺されなかった、人間の残りの者たちは、悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをし、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続けた。²¹ また彼らは、自分たちが行っている殺

人、魔術、淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。

頑なな心の不思議について、午前礼拝でお話しました。ぜひ、それを聞いてください。

黙示録 16 章では、獣の国の者たちに、神の裁きが極みを達して災いを下しています。それでも、彼らは悔い改めないどころか、神を冒瀆しています。「自分たちに良くするのは当然だ、こんな悪いことをするのは不当だ！」ということでしょうか？いやいや、すべての良きものは、主ご自身から来ているのです。それを、受け入れず、認めず、それで自分自身を神のようにして、何か特別なだと高ぶっているのです。

イエスが、災いが起こっていることについて警告していることがあります。ピラトが、ガリラヤ人の献げるいけにえに、ガリラヤ人たちの血を混ぜたと、イエスに報告する者たちがいました。イエスは、こう言われました。「ルカ 13:2 そのガリラヤ人たちは、そのような災難にあったのだから、ほかのすべてのガリラヤ人よりも罪深い人たちだったと思いますか。3 そんなことはありません。わたしはあなたがたに言います。あなたがたも悔い改めないなら、みな同じように滅びます。」

今、自分が生きているのが、神の憐れみによるのだということを一切、認めていません。何か災いが起こると、なぜ神がいるなら、こんな悪いことを起こすのか？と、神を罵ります。その問いは間違っています。「なぜ、人が死んだのか？」ではなく、「なぜ、自分は生き残ったのか？」ということをお問わないといけません。それは、神が注意喚起するためで、悔い改めてほしいと思われて、猶予を与えておられるのです。ここ 9 章の者たちも、三分の一、殺される者たちの中にいなかったのです。同じように悪を行っているのに、今も生きているのは、彼らが悔い改めることができるようにする、神の憐れみ、猶予なのです。それを悟らずに、全く悔い改めるつもりがありません。

そして、彼らは悪霊を拝み、偶像礼拝をしていました。また、殺人や魔術など、忌まわしいことも行っています。当時のローマ社会に、偶像礼拝と魔術、淫らな行いが混じり合った異教が社会に浸透し、その背後に悪霊がいます。しかし、その悪霊によって、彼ら自身が悪霊によって苦しめられるのです。人間は自分を痛めつける者にかえって仕えていくという、異様な性向があります。しかし、神はキリストの受けられた傷で、その傷を癒し、愛の慰めで包みたいと願われています。

神の福音に信じ、従わない時代は、必ず世の霊が顕著に現れます。に従っています。人々が人としての心を失い、真理に対して無知、道徳的なことに無感覚になります。そして、悪霊どものしていることとしか思えないことが、どんどん起こります。それでも、後に来る災いに比べれば無に等しいほどです。神の御怒りが来る前に、悔い改めて、福音を信じましょう。そして、この時代から、救われてください。